

高校の個性化・多様化政策と 生徒の進路意識の変容 —新たな選抜・配分メカニズムの誕生—

荒川（田中）葉

1. 問題設定

本稿の目的は、高校教育改革が進行する中で、1) 高校のカリキュラムがどのように再編されているか、2) それが生徒の学習への構えや進路意識にどのような影響をもたらす傾向があるか、2県で実施した質問紙調査及び資料収集調査から解明することにある。そのことを通して、高校教育改革のもとで高校の選抜・配分機能がいかに修正されつつあるか、一つの視座を提示することを試みる。

我が国の選抜・配分研究は、戦後、日本に威信の高い社会的地位をめざす大衆競争が生起する中で、教育達成が地位達成の重要な規定要因となってきたことを指摘してきた（藤田 1980, 荘谷 1995）。この際に中核的な選抜・配分の機関となってきたのが高校である。高校は普通科一職業科、普通科の中でも進学校一非進学校という序列構造を形成し、学力に応じて生徒を振り分けてきた（Rohlen 1983, 耳塚・岩木 1983）。法制的に進路が限定されることはないにしても、どの学科・ランクの高校に入学できるかで到達可能な進路について見通しが立つため（藤田 1980），生徒は分不相応な進路に対する欲求を閉ざし（莊谷 1986），入学した高校のランクに応じて分相応にアスピレーションを加熱・冷却させて進路を形成する傾向があった（竹内 1995）。そのため「できない」烙印を押された下位校の生徒の過度なアスピレーションの冷却と、高校の学習に対する意欲の欠如が長らく問題視してきた。

こうした輪切り選抜の構造を、カリキュラム改革によって修正しようとしたのが、臨時教育審議会（1984～87）後に本格化した高校の個性化・多様化政策であったとい

日本学術振興会特別研究員

える。容易に序列に還元されない「特色」を持つ、多様なカリキュラムを提供する学科・コースの設置は、①生徒の高校選択の基準を多元化し、②高校の授業内容に関心をもてなかつた生徒に学習意欲を与え、③高校の学科・ランクに規定されてきた高卒後の進路選択を興味・関心を重視したものへと転換し、④ひいては高校階層構造や輪切り選抜の構造をも是正すると予測された⁽¹⁾。こうして特色ある学科・コースや総合学科などの「新タイプの学科・コース」⁽²⁾が盛んに設置されたのである。つまり、高校教育改革は、興味・関心を重視した学習・進路形成を促すことで、業績主義的な原理が浸透した選抜・配分のメカニズムを修正しようとする試みであったといえる。

しかし、実際に新タイプの学科・コースがどの学校ランクでどのように導入され、それが生徒の進路形成のあり様をいかに変化させているかは、次節で見るように十分に解明されてこなかった。改革の帰結を解明することは政策科学的にも学術的にも重要である。このような問題認識から本稿は、高校教育改革下で進行しているカリキュラム改革の実態をとらえ、高校の選抜・配分機能がいかに修正されているか解明することを試みる。

2. 先行研究のレビュー

高校の個性化・多様化政策が高校の教育内容や進路形成機能をいかに変化させるかという点は、先行研究にも共有された関心であった。こうした目的の研究は、改革自体が十分に進行していなかったこともあり、まず先導的実践について事例的に解明する形で進められた。菊地（1996）は、総合選択制高校、総合学科における教員対象聞き取り調査から、これらの高校における科目選択が多様な内容になっておらず、私大的受験科目にパターン化する傾向があることを報告した。こうした知見は、小川（1997）の総合選択制高校における事例研究でも明らかにされ、ここから高校教育改革下で進行しているのは形を変えた受験競争であるとの予測的評価がたてられた（菊地 1996, 耳塚 1996）。しかし、これに異を唱えたのが岡部（1997）である。岡部は底辺校的な専門学科から転科した総合学科が、むしろ従来の専門学科の枠組みに沿って生徒の学習内容を枠づけていることをエスノグラフィーから明らかにし、改革の中ですべての高校が進学効果を求めてカリキュラムを再編しているわけではないことを指摘した。また、田中（2000）は総合選択制高校1校、総合学科2校で観察を行い、成績上位校は生徒に受験科目を選ぶように指導するのに対し、下位校は関心のままに科目を選ばせる傾向があることを報告した。このように見ると、改革下におけるカリキュラムの再編のあり様とその意味は学校によって異なっており、学校ランクな

高校の個性化・多様化政策と生徒の進路意識の変容

どの条件も考慮に入れた上で、より調査規模を拡大していくことが必要といえる。

なお近年、大規模な調査によって改革の動向をとらえる研究もでてきたが、これらの研究は下記の点で、カリキュラム改革の実相および生徒の進路形成の動向を十分にとらえられたとはいえないかった。荒井ほか（2000）は、学校ランク差も考慮に入れながら高校のカリキュラムに関する大規模調査を実施したが、①総単位数や選択科目単位数、類型数等の大枠でとらえた分析を中心であり、②科目の内容については入試科目の開講・非開講に限って分析を行ったことから、実際に個々の学校がどのような教科編成のカリキュラムを組んでいるのか、十分に解明されずに残った。また、飯田ほか（1999）は特色ある学科・コースについて、設置状況および生徒の学習への構えに関する大規模調査を行ったが、こちらは学校ランクを不問にしたため、こうした改革がどのランクの高校で起こっているのか解明されずに残った。一方、樋田ほか（1999）は、18年前の調査と同一の高校11校を対象とした生徒対象質問紙調査を実施し、生徒がかつてほど勉強しなくなっていること（苅谷）、業績的主義的な競争にのらなくなる傾向があること（堀）を指摘したが、そうした変化と改革政策との関係は検証されずに残った。また対象校が中位ランク以上に偏っていたため、高校全体が果たす選抜・配分機能の変容を十分に解明するには至らなかった。

高校がはたす選抜・配分機能は多大な研究が蓄積された領域であり、現在それを大幅に修正するような組織変動が生じつつあるにも関わらず、そこでいかなる変化が生じているか解明する研究は十分に行われていないのである。このような問題認識から本稿は、高校教育改革の中で行われているカリキュラム改革の実態について解明し、それが生徒の進路形成にいかなる影響をもたらすか考察することを試みる。

3. 調査の方法

ここで分析するデータは、樋田ほかが97年、99年にX県12校、Y県18校に対して実施した、①生徒対象質問紙調査、②校内文書資料の文献調査、③教員対象インタビュー調査の結果である。この調査では、X・Y両県のそれぞれ1地域に焦点を当て、当該地域の全高校を網羅するように調査対象校を設定した。よって、それぞれの地域の高校階層構造をそのままとらえることが可能になっている。X県は東北地方、Y県は中部地方の県で改革先進県ではない。文部省が刊行する『高等学校教育の推進に関する推進状況』を見るかぎり、平均的な取り組みを行っている県である。したがって全国的な状況を推し量るのに適しているといえよう。本稿では主に、①教育課程表の分析（教員対象インタビューも補足的に扱う）、②生徒対象質問紙の分析を実

施する。生徒対象質問紙は各高校の2年生4クラス以上に対して実施した。対象クラスの選定に当たっては、その学校の学科・コース構成が反映されるように調査を依頼した。サンプル数は、X県1,810、Y県3,242である。なお、97年調査の詳細は樋田・耳塚・岩木・苅谷（2000）を、99年調査の詳細については樋田・荒川・金子・耳塚・堀・苅谷・大多和・岩木（2000）を参照されたい。

4. 調査結果

(1) カリキュラムの再編

まず、高校教育改革が進行する中で、高校のカリキュラムがどのように再編されているか見ていく。はじめに特色ある学科・コースや総合学科などの「新タイプの学科・コース」が、どの学校ランクで導入されているか概観する（表1）。なお、新タイプの学科・コースの定義は困難であるが、本稿では、①個性化・多様化政策が展開する契機となった1978年の学習指導要領の改訂後に設置された学科・コースで、②従来からの普通科普通コース・職業系専門学科に属さず、③入試段階から別枠で募集するという3つの条件を満たすもの⁽³⁾、と定義する。職業系の小学科については、新タイプの学科・コースといえるのか従来からの職業系専門学科と変わらないのか判別がつきにくいが、本調査対象校における職業系の小学科は従来の職業系専門学科と変わらない内容であったため、明確に近年の改革ででてきた「福祉」（飯田研究代表1999）を除いては、専門学科のカテゴリーに含めた。また、学校ランクについては、調査票中中学時の成績について9段階で自己申告してもらい（9が最上位、1が最下位）、学校ごとに平均して、7.00以上の高校を上位校、7.00未満、5.50以上の高校を中位a校、5.50未満、4.00以上の高校を中位b校、4.00未満の高校を下位校と設定した。

さて、表1を見ると、次のことがわかる。X県でもY県でも、上位校ではほとんど「新タイプの学科・コース」は導入されていないが、それ以外のランクではまんべんなく導入されているといえる。

しかし、「新タイプの学科・コース」といっても、実態を見ると教養的な内容になっている可能性もあれば、受験教育にシフトした内容になっている可能性もある。教育改革下で進行しているカリキュラム改革の実態を解明するためには、専門領域や教科構成にまで踏み込んで分析する必要がある。また、普通科の普通コースや専門学科のカリキュラムと比較して特性を把握する必要がある。そこで、教育課程表をデータソースに「普通科・普通コース」「新タイプの学科・コース」「職業系専門学科」の

高校の個性化・多様化政策と生徒の進路意識の変容

表1 学校ランク別 カテゴリー別コース数

	X 県				Y 県			
	学校 ID	普通科・普通コース	専門学科	新タイプの学科・コース	学校 ID	普通科・普通コース	専門学科	新タイプの学科・コース
上位	X県上位I	1			Y県上位I	1		1(人文科学コース)
	X県上位II	1			Y県上位II	2(理数科1)		
中位a					Y県上位III	2(理数科1)		
	2校	2コース	0コース	0コース	3校	5コース	0コース	1コース
中位b	X県中a I	1		1(外国語科)	Y県中a I	1		1(音楽コース)
	X県中a II	1			Y県中a II	1		1(自然科学コース)
中位b	X県中a III	1			Y県中a III	1		1(情報コース)
					Y県中a IV	1		1(国際コース)
中位b	3校	3コース	0コース	1コース	4校	4コース	2コース	4コース
	X県中b I	1		1(人文科)	Y県中b I			1(総合学科)
中位b	X県中b II*	2(特進1)		4(文化教養コース/吹奏楽コース/美術コース/書道コース/体育コース/国際観光コース)	Y県中b II	1		1(福祉コース)
	X県中b III			3	Y県中b III	1		1(国際コース)
下位	X県中b IV			7	Y県中b IV*	4(特進2, 実務1)		1(国際英語コース)
					Y県中b V*	1		
下位					Y県中b VI		7	
					Y県中b VII		4	
下位	4校	3コース	14コース	7コース	7校	7コース	12コース	4コース
	X県下位I	1			Y県下位I*	2		1(総合コース)
下位	X県下位II	1		2(フィジカルコース/ビジネスコース)	Y県下位II*	2		2(情報コース/体育進学コース)
	X県下位III*	1		1(情報コース/福祉科)	Y県下位III			4(福祉科)
下位					Y県下位IV		4	
	3校	3コース	3コース	4コース	4校	4コース	9コース	4コース

注1) 学校IDの後ろに※が付してあるものは私立

2) 学校IDがイタリックになっているものは専門高校

3) 小学科もコースに準ずるものとして、コースとしてカウント

表2 学校ランク別 カリキュラム分類

<上位校>

教科内容別分類 領域別分類	5教科型	専門導入型	専門特化型	多教科型
普通通科 普通コース	7 コース			
新タイプの学科 ・コース	特色コース— 人文・理数 ・語学英語 特色コース— 情報	1 コース		
特色コース— 芸術・体育 ・英語以外 の語学				
特色コース— 福祉・国際 観光・その他				
総合学科				
職業系 専門学科				

教科内容別分類 領域別分類	5教科型	専門導入型	専門特化型	多教科型
普通通科 普通コース	7 コース			
新タイプの学科 ・コース	特色コース— 人文・理数 ・語学英語 特色コース— 情報	2 コース		
特色コース— 芸術・体育 ・英語以外 の語学	1 コース	1 コース		
特色コース— 福祉・国際 観光・その他				
総合学科				
職業系 専門学科			2 コース	

<中位b校>

教科内容別分類 領域別分類	5教科型	専門導入型	専門特化型	多教科型
普通通科 普通コース	8 コース			
新タイプの学科 ・コース	特色コース— 人文・理数 ・語学英語 特色コース— 情報	1 コース (いわゆる非進学 類型)		
特色コース— 芸術・体育 ・英語以外 の語学	1 コース			
特色コース— 福祉・国際 観光・その他				
総合学科			4 コース	3 コース
職業系 専門学科			2 コース	1 コース

<下位校>

教科内容別分類 領域別分類	5教科型	専門導入型	専門特化型	多教科型
普通通科 普通コース	5 コース			
新タイプの学科 ・コース	特色コース— 人文・理数 ・語学英語 特色コース— 情報	2 コース (いわゆる非進学 類型)		
特色コース— 芸術・体育 ・英語以外 の語学			3 コース	
特色コース— 福祉・国際 観光・その他			2 コース	
総合学科				2 コース
職業系 専門学科				1 コース

高校の個性化・多様化政策と生徒の進路意識の変容

いずれについても専門領域と教科内容に着目して分類を試みた。その結果を示せば表2の通りである（以下、表2を参照しながら読み進められたい）。

具体的には、次の手順で分類作業を行った。まず、専門領域に着目して、学科・コースを、「普通科・普通コース」、「特色ある学科・コース—人文・理数・語学英語」、「特色ある学科・コース—情報」、「特色ある学科・コース—芸術・体育・英語以外の語学」、「特色ある学科・コース—福祉・国際観光・その他」「総合学科（総合コース）」「職業系専門学科」の7領域に分けた。これを専門領域別分類として表の縦次元に位置づけた（専門領域別分類）。

次に各学科・コースの教科構成に着目して、「5教科型」⁽⁴⁾「専門導入型」「専門特化型」「多教科型」に分類した。具体的には、教科科目を「国社数理英の5教科の科目」「普通科目の体育、芸術、家庭科の科目」「その学科・コースが掲げる領域の専門科目」「その学科・コースの専門領域ではない専門科目（たとえば体育コースの芸術科目）」の4カテゴリーに括り直し、学科・コースごとに、各カテゴリー別単位数が全教科科目単位数に占める割合を算出した。なお、この際に、専門教科の「理数」「英語」の科目は、「5教科」の方にカウントした。この数値に基づいて各学科・コースを上記4つの型に分類したが、各型の基準は次の通りである。「5教科割合が70%以上」の学科・コースが「5教科型」、「5教科割合が70%以下、その学科・コースが掲げる領域の専門科目割合が30%以下」の学科・コースが「専門導入型」、「その学科・コースが掲げる領域の専門科目割合が30%以上」の学科・コースが「専門特化型」、「ひとつの領域の専門科目割合が30%以下で複数の専門教科の科目を履修、専門科目全体の割合が30%以上」の学科・コースが「多教科型」である。これを教科内容別分類として、表の横次元に位置づけた（教科内容別分類）。なお、この4つの型は論理的に包括的ではないが、事実上すべての学科・コースが一義的に分類可能であった。

こうして得られた分類表に各ランクの高校の学科・コースを位置づけたのが表2である。

表2からは次の点が読みとれる。上位校では、いずれのコースも、教科内容別分類では「5教科型」に分類された。唯一設置された新タイプの学科・コースも、「人文・理数・語学英語」領域で、「5教科型」の教科内容であり、カリキュラムは多様になっていなかった。中位a校も、新タイプの学科・コース5コース中、2つが「人文・理数・語学英語」領域で「5教科型」であった。しかも専門領域別分類で「情報」に分類された1コース、「芸術・体育・英語以外の語学」に分類された2コース中1コースは「5教科型」に分類された。情報コースについては、Y県中位aⅢ校の教育

表3 新しいタイプの学科・コース 内容とねらい

上位校	<Y県上位I・人文科学コース>表現力をつけることを大きな目的としている。1, 2年中心にそのような指導を行い、 <u>3年は受験準備ということであまり特色はない。</u>
中位a校	<Y県中a I・外国語科>英語・ロシア語。県の方から打診。中学校へ学校説明会に行き、<ロシア語科>との誤解、<進学に不利>との誤解を解くように心がけている。いい生徒が集まることで進路実績が上がった。 <u>語学への関心。これまで合格しなかったような大学、東京外語、大阪外語にも合格。</u> <Y県中a II・音楽コース> <u>「あくまでも普通科なのだから」普通の科目もしっかりやらせる。</u> 創立当初は音楽関係の進路を志望する生徒は半分くらいであったが、最近はほぼ全員が音楽関係の進路、「それも国公立」を志望している。 <Y県中a III・自然科学コース> <u>自然科学コースは理系分野（数学理科）に興味関心の高い生徒を募集してさらに伸ばしてやることを目的としている。</u> 自然科学コースを目指してくる生徒には目的意識が明確で学習意欲が高い生徒が多い。国公立大学の入試にもよい成果、普通科にもよい影響を与えている。
中位b校	<X県中b I・人文科>理数が苦手な女子のために作られた。文系得意な生徒の能力を伸ばすため、国語、地歴、公民、英語に多くの授業時間を当て、文科系の国公立、私立大を目指す。 <X県中b II※・教養コース（文化教養、吹奏楽、美術、書道）、体育コース、国際観光コース>多様化している生徒のニーズに答えられないと私学はダメ。 <u>生徒の興味に応じてコースを分けている。</u> <Y県中b I・総合学科>普通科の活性化と農業学科を守るために。平成6年に県側に総合学科という考えが具体化し、当校が名乗りを上げた。文化系列、理工系列、国際系列、美術系列、体育・武道系列、バイオ系列を設置。 <Y県中b II・人間福祉コース>人間福祉コースはさらに福祉系、体育系、芸術（音楽・美術・書道）系に別れている。家政科の中から福祉コースを残し、部活で強いスポーツ、合唱部をベースとしたコースづくりを意図した。 <Y県中b III・国際コース>とにかく <u>生徒がやる気を出すために、基礎学力の向上、分かる授業、達成感を感じる指導</u> を目標にしている。オーラルなど、会話を重視したカリキュラムを組んでいる。
下位	<X県下位II・ビジネス、フィジカル>フィジカルは体育の方に進学とかの方向用としてできた。ビジネスは就職用。 <X県下位III※・情報コース・福祉科>今年から6コース化。 <u>コースの意図は生徒の多様な能力・適性、興味・関心、進路希望に対応すること。</u> <Y県下位I※・総合コース>学習意欲をどのようにしてたせられるか考えた。生徒の学びたい科目を学ばせて就学意欲をもたせようとして、アンケート調査の結果をもとに学校裁量科目などを設置した。 <Y県下位III・生活福祉科>生活福祉科は平成8年から。福祉と生活文化の2類型に分かれる。生活福祉科は県の方から打診。各地区に特色ある学校をつくる方針の一環として。

高校の個性化・多様化政策と生徒の進路意識の変容

課程表を見たところ、情報の専門科目として理数の科目が開設されていたためである。一方、X県中位a I校の外国語科はロシア語の科目が8単位あったが、その分普通科目の「体育・芸術・家庭科」の単位数が抑えられ、5教科割合は70%以上が維持されていた。つまり、上位校と中位a校では新タイプの学科・コースといっても、およそ5教科中心のカリキュラムが維持されているのである。

これに対し、中位b校になると、「情報」「芸術・体育・英語以外の語学」「福祉・その他」の領域で「専門導入型」や「専門特化型」のカリキュラムを組むコースが多数見られる。下位校に至っては「多教科型」の教科編成をとるコースも数コース見られる。このように改革の中で行われているカリキュラムの再編は、すべてのランクの高校で同じ原理で進行しているわけではない。上位校、中位a校ではあくまでも5教科を重視しながら、その割合を微調整する再編が行われているのに対し、中位b校・下位校では、5教科以外のさまざまな教科が少なからぬ比重で入り込む形でカリキュラムが再編されているのである。

それでは、こうした新タイプの学科・コースでどのような教科指導が行われているのだろうか。表3は教務主任対象インタビューにもとづき、各学校の新タイプの学科・コースにおける教科指導の状況をまとめたものである。なお、教員対象インタビュー調査は、調査対象校30校中23校（X県12校、Y県11校）のみで実施したため、改革実施校すべての状況を網羅的にとらえることはできないが、おおよその傾向は把握できると思われる。

表3からは次の傾向が窺える。まず上位校は、そもそも改革に着手している高校がY県上位I校しかないが、「受験準備ということであまり特色は出さない」という言葉に見られるように、受験教育を意識し大幅な改革が図られていないことが窺える。

一方、中位a校では、その領域に関心を持つ生徒を集め効率よく学習させながら、大学進学に導こうとする傾向が見られる。例えば外国語科を設置したX県中位a I校、自然科学コースを設置したY県中位a II校は「語学への関心。これまで合格しなかったような大学、東京外語、大阪外語にも合格。（X県中位a I）」「自然科学コースは理系分野（数学理科）に興味関心の高い生徒を募集してさらに伸ばしてやることを目的としている。……国公立大学の入試にもよい成果（Y県中位a II）」と語る。また音楽コースを設置したY県中位a I校も「あくまでも普通科なのだから普通の科目もしっかりやらせる。……最近はほぼ全員が音楽関係の進路、それも国公立を志望している」と教科指導の方針を語っている。あくまでも大学受験を念頭におきながらカリキュラムの再編が行われていることが窺える。

これに対し中位 b 校、下位校になると、大学進学との関わりでコースの内容・指導方針を説明しなくなり、生徒の興味・関心、学習意欲との関わりでコースの内容・指導方針を説明するようになる。たとえば、「生徒の興味に応じてコースを分けている。(X県中位 b II)」「とにかく生徒がやる気を出すために(Y県中位 b III)」「コースの意図は生徒の多様な能力・適性、興味・関心、進路希望に対応すること。(X県下位 III)」「学習意欲をどのようにしてたせられるかを考えた。(Y県下位 I)」等である。中位 b 校、下位校では、学校の授業に関心を持たせることを目的として、非アカデミックで多様な教育が行われるようになっているといえる。

以上、高校の個性化・多様化政策の下で進行しているカリキュラムの再編については次のようにまとめられる。既述のように、高校の個性化・多様化政策は、興味・関心・希望進路に応じた選択学習の機会を提供することで、興味・関心に基づく高校選択や高卒後の進路選択を促そうとするものであった。しかし分析の結果、ドラスティックなカリキュラムの多様化はもっぱら中位 b 校、下位校で進行しており、むしろ改革の中で上位校・中位 a 校と、中位 b 校・下位校とが、アカデミックな科目に縛ってエリート教育を行うセクターと、興味・関心のままに学ばせるセクターへ分化する傾向が見られたのである。

(2) カリキュラムの多様化と生徒の学習に対する構え・進路意識の変容

それでは、こうしたカリキュラムの差異が、生徒の高校に対する認識や学習への構え、さらに進路選択のあり様にどのような影響を及ぼしているか、生徒対象質問紙から見ていく。本稿では特に進学をめぐる動向を中心にして、伝統的普通科普通コースと新しいタイプの学科・コースの生徒の意識の差に着目した分析を試みる。なお、同一の高校でも、コースによって生徒の成績が異なることがあるため、ここではコースを単位にランクを括りなおした。各コース（および小学科）別に生徒の中学校時成績の平均を算出し、7.00以上の学科・コースを「上位群」、7.00未満、5.50以上の学科・コースを「中位 a 群」、5.00未満、4.00以上の学科・コースを「中位 b 群」、4.00未満の学科・コースを「下位群」と設定した。もっともこのランク分けによって、前述の学校ランクと異なるランクに分類されたのは、Y県中 b IV 校*の特進コース（中位 b 校だが学科・コース分類では上位群）、X県中 b II *の特進コース（中位 b 校だが学科・コース分類では中位 a 群）、同じく X 県中 b II *の教養コース（中位 b 校だが学科・コース分類では下位群）、Y 県下位 V *の普通コース（中位 b 校だが学科・コース分類では下位群）の 4 コースのみであり、特に新タイプの学科・コースについてはほぼ表

高校の個性化・多様化政策と生徒の進路意識の変容

表4 群別・コースタイプ別 サンプル数

	上位群			中位a群			中位b群			下位群		
	N	成績の平均	成績の標準偏差	N	成績の平均	成績の標準偏差	N	成績の平均	成績の標準偏差	N	成績の平均	成績の標準偏差
普通コース	1054人	7.65	1.32	841人	6.17	1.40	493人	5.13	1.47	556人	3.62	1.59
新タイプの学科・コース	27人	7.70	1.20	144人	6.26	1.53	395人	4.96	1.48	290人	3.27	1.56

2の分類通りである。なお、群別・コースタイプ別に見たサンプル数、生徒の成績の平均及び標準偏差は、表4の通りである。各群ごとの「普通コース」と「新タイプの学科・コースの生徒」の成績は、平均・標準偏差ともに差がなく、カイ二乗検定でも有意な差はなかった。よって両者は成績の上ではほぼ同質といえる。なお上位群についてはサンプル数のコース差が大きく、統計的な有効性は乏しいが、傾向を見るために記述統計量は参照する。以下分析は、同一群内における、普通コースの生徒と新タイプの学科・コースの生徒の回答傾向を比較する形で進める。

a. 高校入学をめぐる差異

まず高校入学をめぐる差異について見る（表5）。表5からは次の傾向が窺える。

「はじめから現在の高校に入りたかった」と答える割合は、すべての群で新タイプの学科・コースの方が高くなっている。「あなたは現在通っている学校についてどう思っていますか」という質問に対し、新タイプの学科・コースで「はじめから今の学校に入りたかった」（①）と答えた者の割合は、上位群で63.0%，中位a群で39.8%，中位b群で28.1%，下位群で22.5%となっており、新タイプの学科・コースの方が普通コースよりそれぞれ9.0, 12.7, 5.9, 6.6ポイント高い。逆に、「本当は他の学校に入りたかった」と答える割合は新タイプの学科・コースで低くなっている。中学時の成績がほぼ同じ生徒を比べれば、新タイプの学科・コースで不本意入学者が少ないといえる。

また、新タイプの学科・コースの生徒は、高校・学科・コースを選択する際に、「自分の興味・関心」「将来希望する進路」を重視したと答える傾向が見られる。「あなたは現在の高校・学科・コースを選択する際に、次のことをどれだけ重視しましたか」（②）という問い合わせに対し、「自分の興味・関心」（b.）を「重視した」と答えた割合は、新タイプの学科・コースの方が、上位群で34.3，中位a群で21.9，中位b群で31.2，下位群で17.5ポイント高くなっている。「将来希望する進路」（c.）を「重視し

表5 高校選択の基準 (%)

	上位群		中位a群		中位b群		下位群	
	伝統的 普通 コース	新タイプ 学科・ コース	伝統的 普通 コース	新タイプ 学科・ コース	伝統的 普通 コース	新タイプ 学科・ コース	伝統的 普通 コース	新タイプ 学科・ コース
	N=1054	N=27	N=841	N=144	N=493	N=395	N=556	N=290
① あなたは現在通っている学校についてどう思っていますか								
1. はじめから今の学校に入りたかった		54.0<63.0		*** 27.1<39.8		** 22.2<28.1		*
2. 本当は他の学校に入りたかった		18.8≈18.5		39.3>27.1		42.7>34.7		47.2>41.0
3. 特に入りたい学校はなかった		27.2>18.5		33.6≈33.1		35.1≈37.2		36.9≈36.5
② あなたは現在の高校・学科・コースを選択する際に、次のことをどれだけ重視しましたか								
a. 自分の成績		86.5<92.6		*** 82.9>69.4		*** 78.4>62.1		*** 59.8>47.4
b. 自分の興味・関心		*** 43.5<77.8		*** 36.4<58.3		*** 30.9<62.1		*** 33.9<51.4
c. 将来希望する進路		*** 67.9<92.6		** 47.9<58.7		*** 31.0<50.9		*

※ ***…1%水準で有意, **…5%水準で有意, *…10%水準で有意

※ 無回答は除いて計算している。

※ ②の a.~c. については、それぞれ「(1)とても重視した」「(2)まあ重視した」「(3)あまり重視しなかった」「(4)全く重視しなかった」の4段階で答えてもらったうちの(1)(2)の合計%を表記した。

た」と答えた人の割合も、新タイプの学科・コースの方が、各群でそれぞれ24.7, 10.8, 19.9, 5.4ポイント高くなっている。一方、「自分の成績」(a.)を「重視した」と答えた割合は、上位群以外では新タイプの学科・コースの生徒の方が低く、中位a群で13.5, 中位b群で16.3, 下位群で12.4ポイント低くなっている。ここからは、同じ群の普通コースの生徒と比べ、新タイプの学科・コースの生徒の方が、今の高校や学科・コースを、「成績」から選ばせられたのではなく、「自分の興味・関心」「将来希望する進路」から選択したのだと認識する傾向があることが窺える。

b. 高校の授業に対する評価

次に、高校の授業に対する認識について、表6で見ていく。表6からは、新タイプの学科・コースの生徒の方が、高校の授業内容に対して、興味・関心にあっていると

高校の個性化・多様化政策と生徒の進路意識の変容

表6 高校の授業に対する認識 (%)

	上位群		中位a群		中位b群		下位群	
	伝統的 普通 学科・ コース	新タイプ 普通 学科・ コース	伝統的 普通 学科・ コース	新タイプ 普通 学科・ コース	伝統的 普通 学科・ コース	新タイプ 普通 学科・ コース	伝統的 普通 学科・ コース	新タイプ 普通 学科・ コース
	N=1054	N=27	N=841	N=144	N=493	N=395	N=556	N=290
③ 生徒の興味関心に応じた指導に力を入れている		*** 12.0<37.0		*** 11.6<21.7		*** 15.7<48.1		** 20.3<26.4
④ 高校での勉強は、自分の趣味・関心にあわないものが多い		55.3>48.1		67.9>62.5		*** 71.3>60.2		* 64.6>57.8

※ ***…1%水準で有意, **…5%水準で有意, *…10%水準で有意

※ 無回答は除いて計算してある。

※ 「はい」「いいえ」の2段階で答えてもらったうちの「はい」の%を表記した。

評価する傾向が見て取れる。高校が「生徒の興味関心に応じた指導に力を入れている」(③)と思うかという質問に対し、「はい」と答えた者の割合は、いずれの群でも新タイプの学科・コースの方が高い(上位群で25.0, 中位a群で10.1, 中位b群で32.4, 下位群で6.1ポイント高)。逆に「高校での勉強は、自分の趣味・関心にあわないものが多い」(④)を肯定する者の割合は、新タイプの学科・コースの方が、中位b群で11.1, 下位群で6.8ポイント低い。このように新タイプの学科・コースの生徒は授業内容が興味・関心にあってると認識する傾向があるといえよう。

c. 業績主義的な競争に対する意味づけ、学習への構え

しかし、次に見るように学習に対する構えは、同じ「新タイプの学科・コースの生徒」でも、群によって明確に異なる傾向がある(表7)。上位群、中位a群の新タイプの学科・コースの生徒は、普通コースの生徒と同様もしくはそれ以上に、「いい」大学や就職先を目指すいわば業績主義的な競争の中で、より上位の進路形成を目指して勉強する傾向が見られる。これに対して、中位b群、下位群の新タイプの学科・コースの生徒はそういった価値尺度から離れる傾向が見られるのである。

「他人の試験の成績が気になるほうだ」(⑤)「よい成績をとると、友だちに優越感を感じる」(⑥)は、業績主義的な競争へのこだわりを図る指標といえるが、これらへの回答は、上位群、中位a群では、普通コースと新タイプの学科・コースの生徒でさほど変わらない。これに対し、中位b群、下位群では、新タイプの学科・コースの生徒の方が普通コースの生徒に比べ、否定的な回答をする傾向が見られる。また「できるだけいい大学や就職先に入れるよう、成績を上げたい」(⑦)を肯定する割合

表7 業績主義的な競争に対する認識、学習への構え (%)

	上位群		中位a群		中位b群		下位群	
	伝統的 普通 コース	新タイプ 学科・ コース	伝統的 普通 コース	新タイプ 学科・ コース	伝統的 普通 コース	新タイプ 学科・ コース	伝統的 普通 コース	新タイプ 学科・ コース
	N=1054	N=27	N=841	N=144	N=493	N=395	N=556	N=290
⑤ 他人の試験の成績が気になるほうだ	50.2<55.6		52.9=49.3		51.4>38.9		45.1>40.4	
⑥ よい成績をとると、友だちに優越感を感じる	** 43.5<63.0		36.1<42.0		38.0>34.1		37.1>27.4	
⑦ できるだけいい大学や就職先に入れるよう、成績を上げたい	** 74.5<92.6		69.2=68.8		*** 64.8>54.1		** 62.8>55.4	
⑧ 勉強時間			*** 19.4>11.1		48.0>28.2		*** 54.2=56.8	
1. 30分以内	47.2<55.6		45.1=47.2		37.6=37.3		16.5>9.8	
2. 30分から2時間	33.4=33.3		6.8<24.6		8.2=5.9		3.8>1.4	

※ ***…1%水準で有意、**…5%水準で有意、*…10%水準で有意

※ 無回答は除いて計算してある。

※ ⑤⑥⑦については、「はい」「いいえ」の2段階で答えてもらったうちの「はい」の%を表記した。

も、上位群、中位a群では、コース間で変わらないのに対し、中位b群、下位群では、新タイプの学科・コースの生徒の方がそれぞれ10.7、7.4ポイント低い。

また⑧は実際に、家で勉強する時間についてたずねたものであるが、中位a群では、新タイプの学科・コースの生徒によく勉強する生徒が多いのに対して、下位群では、新タイプの学科・コースの生徒の方が勉強をしなくなっているのである。

d. 希望進路

さて、希望進路についてはどうか（表8）。同一成績群で比較した際に、普通コースの生徒と新タイプの学科・コースの生徒には、どのような違いが見られるか。

表8を見ると、こちらも「新タイプの学科・コースの生徒」の回答が、群によって異なっているのがわかる。まず、上位群については統計的な差違は見られない。中位a群については、新タイプの学科・コースの生徒が四年制大学を希望する割合は、普通コースの生徒に比べ14.9ポイント高い。逆に中位b群では、新タイプの学科・コースの生徒が四年制大学を希望する割合は9.3ポイント低くなっている。下位群でも12.5ポイント低い。このように、中位a群の新タイプの学科・コースの生徒は、普通

高校の個性化・多様化政策と生徒の進路意識の変容

表8 希望進路 (%)

	上位群		中位a群		中位b群		下位群	
	伝統的 普通 コース	新タイプ 学科・ コース	伝統的 普通 コース	新タイプ 学科・ コース	伝統的 普通 コース	新タイプ 学科・ コース	伝統的 普通 コース	新タイプ 学科・ コース
	N=1054	N=27	N=841	N=144	N=493	N=395	N=556	N=290
⑨ あなたが希望する卒業後の進路は次のどれですか								
1. 4年制大学	92.8	<100.0	70.8	<85.7	54.8	>45.5	23.7	>11.2
2. 短大	0.9		6.4	2.2	15.8	16.9	13.3	11.5
3. 専門学校・各種学校	3.3		15.3	9.3	17.6	24.3	31.6	37.5
4. 家事・家の手伝い	0.4		0.5	0.7	0.4	0.3	0.9	0.4
5. 就職	2.6		7.0	2.1	11.4	13.0	30.5	39.4

※ ***…1%水準で有意, **…5%水準で有意, *…10%水準で有意

※ 無回答は除いて計算してある。

コースと比べてより四年制大学志向を持つ傾向があるのに対し、中位b群、下位群の生徒は普通コースと比べ、四年制大学以外の進路を希望する傾向があるのである。なお、こうした傾向は性差を統制しても有意な関連が見られた。

以上、生徒対象質問紙の分析をまとめれば、次のようにある。①新タイプの学科・コースの生徒は、いずれの群でも興味・関心からコースを積極的に選択しており、興味・関心にあった学習経験をする傾向が見られた。②しかし、一方、学習への構えや進路意識は同じ「新タイプの学科・コース」でも群で異なる傾向があり、上位群・中位a群の生徒は普通コース以上に上位の進路を志向するのに対し中位b群・下位群の生徒はそうした価値観から退く傾向が見られたのである（既述のように、上位群についてはサンプル数のコース差が大きく、統計的な有効性は乏しいが、あえて記述統計量を見れば中位の群と似た傾向が見られる）。こうした、新タイプの学科・コースの生徒の学習・進路への意識の差は、4.の(1)でみたカリキュラム改革の方向性と密接に関連していると思われる。すでに見たように、同じ「新タイプの学科・コース」でも、上位校・中位a校では大学進学を明確に意識した内容になっていた。それに対し中位b校・下位校では、興味を引きつけることを重視して非アカデミックで多様な教育が行われていた。生徒データの分析は、学校ランクではなくコースランク（群）にもとづいているため、含まれるコースは若干異なるが、両者はほぼ重なっており、新タイプコースの生徒の意識差はこうしたカリキュラム再編の方向性の差を反映していると推察される。つまり、同じ「新タイプの学科・コース」でも、上位校・中位a校のコースは、生徒の興味・関心を大学受験教育から離れない範囲で引きつけ、むしろ業績主義的な競争に生徒をあおる機能を果たしているのに対し、中位b校・下位校の

高校のコースは、興味・関心のままに学ばせ、上位の進路、社会的地位を目指す従来の競争とは違った方に、生徒の学習・進路への意識を向ける働きをしている可能性が指摘できるのである。

5. 結論

既述のように、高校の個性化・多様化政策は、多様なカリキュラムを提供する学科・コースを設置することで、興味・関心に基づく進路形成を促し、学校ランクと進路の対応関係に揺らぎをもたらそうとするものであった。しかし、カリキュラム分析及び教員対象聞き取り調査の結果、①ドラスティックなカリキュラムの多様化はもっぱら中位b校・下位校で進行しており、むしろ改革の中で上位校・中位a校と中位b校・下位校が、アカデミックな教科教育を行うセクターと興味・関心のままに学習させるセクターに分化する傾向があることが明らかになった。またさらに、生徒データの分析の結果、②「新タイプの学科・コース」の生徒は、すべてのランクで「興味・関心」を持って学習するようになりながらも、中位a群ではより業績主義的な競争におられる傾向があるのに対し、中位b群・下位群ではこうした競争から撤退する傾向が見られたのである。このように見ると高校教育改革下で進行しているのは、むしろ選抜・配分システムの分断化である可能性が指摘できる。かつての高校階層構造は、確かに入学した高校のランクによって到達可能な進路の上限を設定する傾向があり、下位校の生徒のアスピレーションの冷却が問題とされた。しかし竹内（1995）が指摘するように、高校階層構造が形成する傾斜別選抜システムは、すべてのランクを業績主義的な競争に巻き込み、各ランクなりにより上の進路を目指すようにし向けるシステムでもあったのである。このように考えると、現在改革下で生じているのは、依然として業績主義的な競争の中で、上位の進路を目指す形で進路を形成させる上位校・中位a校と、生徒の多様化によってもはや業績主義的な進路形成を維持することが困難になった（また改革の理念から維持する必要もなくなった）中位b校・下位校の進路形成機能の分化である可能性が指摘できるのである。

また、もう一つ改革下で進行していることとして指摘できるのは、冷却メカニズムの変容である。かつて成績下位者に対しては、威信の高い進路をめざす競争に参加させながら達成可能な地位を悟らせる形の冷却（cooling down）が作用していた。それゆえ、「できない」烙印を押された生徒の劣等感が問題視された。これに対し改革下、成績下位者に対して働く冷却メカニズムが、興味関心にむけて生徒を引きつけながらいつしか業績主義的な競争から撤退させる冷却（cooling out）へと変化してい

高校の個性化・多様化政策と生徒の進路意識の変容

る可能性が指摘できる。クールアウトの場合、クールダウンのように劣等感にさらされることはない。これまでとは異なる価値観を重視しただけになる。本分析でも、「新タイプの学科・コース」の生徒は、興味・関心を重視して高校・コースを選択したという認識が強く、不本意入学感も軽減されていた。これは、改革目標の一つであり、その意味で個性化・多様化政策は成果をあげたといえるだろう。しかし、注意せねばならないのは、別な価値観にそって進路を選択するうちに業績主義的な競争に参加する機会を喪失する可能性があることである。そして、興味・関心（または「将来の夢」）を重視する進路選択の先にいったい何が待っているのか—⁽⁵⁾、今後はこの点をも熟慮した上で、教育政策を再考していく必要があると思われる。

<注>

- (1) 特色ある学科・コースについては①、②の効果が強く期待され、総合学科については③の効果がより期待される傾向があるが、全体として期待される効果はこのようにまとめられる（飯田 1999,『高等学校入学者選抜の改善等に関する状況（平成11年4月文部省）』）。
- (2) 一般的な用語ではないが、本稿では「普通科」「職業系専門学科」に対して、高校教育改革下で新たに設置されるようになった特色ある学科・コース、総合学科を総称して「新タイプの学科・コース」と定義する。
- (3) 2年次から分化するものもあるが、こうしたコースも定員の半数以上をコースの推薦入学枠で取っていることから、この定義に合致するものとして扱った。
- (4) 社会が公民・地歴に分割されたため、厳密には「6教科」であるが、ここではいわゆる5教科として、「5教科」カテゴリーを用いた。
- (5) 本稿の質問紙調査では、どのような専門学校に行きたいかまでは聞いていないが、X県下位Ⅱ校の教員の話では、「モデルを目指す、バンドをやりたいといった生徒が多く、必ずしも資格取得のために専門学校に行くような実直な進路形成にはなっていないようである。また他県になるが荒川（田中）が総合学科3校で行った調査では、将来の職業として「ゲームプログラマー」「スタイリスト」などの職業をあげる生徒が多かった（田中 2000）。

※ なお、本論文の執筆に際し、高校生徒文化研究会のメンバーである樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦・金子真理子・堀健志・大多和直樹各氏並びに、東京学芸大学連合大学院の岩田考氏より示唆を賜った。ここに感謝申し上げたい。

〈参考文献〉

- 荒井克弘編 2000, 『学生は高校で何を学んでくるか』大学入試センター研究開発部。
- 藤田英典 1980, 「進路選択のメカニズム」山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択』有斐閣, 105-129頁。
- 樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編著 2000, 『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。
- · 荒川葉・金子真理子・耳塚寛明・堀健志・苅谷剛彦・大多和直樹・岩木秀夫 2000, 「高校教育の構造変容(1)一教育活動の組織と教師のパースペクティブー」『日本教育社会学会第52回大会発表要旨集録』54-59頁。
- 飯田浩之研究代表 1999, 『特色ある学科・コースの調査分析』高等学校の特色ある学科等研究会。
- 苅谷剛彦 1986, 「閉ざされた将来像—教育選抜の可視性と中学生の『自己選抜』ー」『教育社会学研究』第41集, 東洋館出版社, 95-109頁。
- 1995, 『大衆教育社会のゆくえ』中公新書。
- 菊地栄治 1996, 「高校教育改革の『最前線』」耳塚寛明・樋田大二郎編著『多様化と個性化の潮流を探る』学事出版, 29-44頁。
- 耳塚寛明 1996, 「高校教育改革と教育構造」耳塚寛明・樋田大二郎編著『多様化と個性化の潮流を探る』学事出版, 88-102頁。
- 耳塚寛明・岩木秀夫編 1983, 『現代のエスプリー高校生ー』No.195号, 至文堂。
- 小川 洋 1997, 「総合選択制高校と高校教育の変動—普通高校の変容を中心にー」菊地栄治編著『高校教育改革の総合的研究』多賀出版, 3-24頁。
- 岡部善平 1997, 「『総合学科』高校生の科目選択過程に関する事例研究—選択制カリキュラムへの社会学的アプローチー」『教育社会学研究』第61集, 東洋館出版社, 143-162頁。
- Rohlen, P. Thomas 1983, 友田泰正訳『日本の高校—成功と代償ー』サイマル出版会, 1988。
- 竹内 洋 1995, 『日本のメリットクラシーー構造と心性ー』東京大学出版会。
- 田中 葉 2000, 「総合学科における科目選択・進路選択」『教育制度学研究』第7号, 86-90頁。

高校の個性化・多様化政策と生徒の進路意識の変容

ABSTRACT

**The Educational Reform Movement and Changes in
the Career Path Consciousness of Students in Japanese
Senior High Schools: The Emergence of New Selection
and Distribution Mechanisms**

ARAKAWA (TANAKA), Yo

(Japan Society for the Promotion of Science)

7-31-6 Toshima, Kita-ku, Tokyo, 114-0003, Japan

The objective of this paper is to explore changes in selection and distribution mechanisms, using data collected through questionnaire surveys conducted in two prefectures in 1997 and 1999.

Many studies have pointed out that Japanese senior high schools have functioned as mechanisms for selecting and distributing students according to their academic achievements, measured by single criterion.

Under these circumstances, the current educational reform movement, which emphasizes diversification and individualization in upper secondary education, aims at the following four objectives: (1) to provide students with a wide range of options, enabling them to study in accordance with their interests, concerns and career paths, in order to diversify the criterions on which their judgements of school quality are based; (2) to diversify the content of education in accordance with students' interests, concerns and career paths in order to enhance their incentives to study; (3) to recommend that student determine their career paths in accordance with their own interests and concerns, lest their post-school plans should be determined by "school rankings"; and (4) to eliminate evaluations that vertically rank post-school plans or occupational careers.

While this educational reform movement raises many questions which must be scrutinized, among them, great importance must be placed on evaluating its influence upon the selection and distribution functions of senior high school education. Therefore, this paper attempts to explore whether senior high school students experience the reorganized schooling irrespective of their school rankings and how the reorganization affects their attitudes toward studying and their post-school plans.

The major findings are as follows: (1) it is the students attending lower-middle-ranking and low-ranking schools who are most influenced by the recent reorganization and reform of secondary schooling; (2) the reorganized schooling at the lower-middle-ranking and lower-ranking schools or courses provides students with satisfying learning experiences; and (3) while recent curricular changes at upper-ranking and upper-middle-ranking schools or courses seem to enhance the aspirations of their students, those at lower-middle-ranking and lower-ranking schools lower them.

This paper hypothesizes that these changes imply the emergence of segregated selection and distribution mechanisms which are characterized by the institutionalization of a "Cooling-Out" mechanism in the public educational system.